

## 加速器質量分析法による春日切・三輪切の<sup>14</sup>C年代測定

小田寛貴<sup>1)</sup>，池田和臣<sup>2)</sup>，中村俊夫<sup>1)</sup>

1) 名古屋大学年代測定総合研究センター

2) 中央大学文学部

### <はじめに>

平安・鎌倉時代に書写された物語や家集の写本で、完本の形で現存しているものは極めて稀である。これは、その古く美しい稀少な筆跡ゆえに、室町時代以降、古写本が一丁ごと、もしくは数行ごとに裁断されて、茶会の折に鑑賞する掛け軸などに利用されてきたためである。これら古写本の断簡が古筆切とよばれるものである。また、古筆切を集めて帖とした古筆手鑑も登場するに至った。さらに時代を経るにつれて、張り込む古筆切の順序に一つの形式が生まれ、それにしたがって古筆手鑑が作製されるようになった。すなわち、手鑑の表には、聖武天皇にはじまる天皇の古筆切、続いて皇族・摂政・関白の古筆切といった具合である。さらに、古筆手鑑が武家・公家の嫁入り道具の一つとされるようになったことで、古筆切の需要は次第に大きくなるに至った。

古筆切は、稀少な平安・鎌倉写本の内容や筆跡を一部分ながらも伝えるものである。しかし、その美しい筆跡を手本とした後世の臨書や、掛け軸・古筆手鑑の需要に応えるべく作製された偽物なども多く含まれている。それゆえ、古典文学や書跡史学・歴史学の研究に古筆切を用いる際には、その書写年代を明らかにしておくことが重要である。

古筆切は写本などの一部分であるために、古文書や古経典・古記録と比べると、その書写年代を判定することが困難である。すなわち、ほとんどの場合、書写年代を記した奥書がなく、さらに裁断されたものである故に、大きさや綴じ方などの形態からの情報を得ることができない。また、書かれている内容も数行の和歌や物語であり、この点からも年代を判定することが難しいのである。ただし、古筆切には、その書写者の名を記した極札が付されているものがある。極札に記された人物の手になるものであることが確実ならば、その生没年などから古筆切が書写された年代を求めることができる。しかしながら、時代の古いものや歴史上有名な人物の筆とされるものほどその根拠は薄く、書風・字形・筆勢・墨色など、すなわち書跡史学の視点からは、極札の記載とは異なる人物の書写であると考えられる古筆切が多く存在している。

これまで筆者らは、年代が既知の古文書・古経典などについて<sup>14</sup>C年代測定を行うことで、加速器質量分析計を用いた<sup>14</sup>C年代測定法が、和紙資料の年代判定法の一つとなりうることを提示してきた(Oda et al., 2000; Oda et al., 2003; Oda et al., 2004)。また、そうした研究成果の上に立ち、年代未詳の古文書・古経典・古筆切、後世の写しや臨書の可能性がある古筆切、また偽物である疑いのあるものについて、その書写年代を明らかにすることを目的として、<sup>14</sup>C年代測定を進めてきた(Oda et al., 2004)。

さて、古筆切は写本などが裁断されたものであるため、元々は一冊の本や同じシリーズの写本を構成していた複数の古筆切が伝来している。こうした同じ形式・筆跡で書かれた古筆切をツレといい、多くのツレが知られる古筆切のなかには総称を付けられたものもある。春日切・三輪切などがその例であり、

極札によれば、それぞれ平業兼 (?-1185-1209-?年)・俊寛 (1142?-1179?年) の手になるものとされている。しかしながら、書跡史学・古文書学の視点からは、業兼・俊寛の筆ではなく、別人の書写によるものであることが示されている。特に、三輪切については、俊寛の活躍した平安末期ではなく、後の鎌倉時代の書であると考えられている。

第 18 回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムでは、春日切・三輪切の書写年代を明らかにすることを目的に行った  $^{14}\text{C}$  年代測定の結果を報告した。また、「世尊寺流の三筆」の一人として知られる藤原行能 (1179~1250?年) の極札をもつ齋宮女御集切についても併せて報告した。本報は、その講演内容をまとめたものである。

### <実験・結果>

古筆切資料から数十 mg の紙片を試料として分取し、蒸留水中での超音波洗浄を行った。その後、60-70°C に加温し、1.2N HCl・1.2N NaOH・1.2N HCl の順で試料を洗浄した。蒸留水による洗浄の後、真空デシケーター中で乾燥させた。得られた試料を、700-900mg の CuO とともにガラス (Vycor) 管内に封入し、加熱 (850°C, 2 h) することで、 $\text{CO}_2$  に変換した。ガラス管内の気体を真空ラインに導入し、エタノール・n-ペンタン・液体窒素などの冷媒を用いて  $\text{CO}_2$  の精製を行った。次いで、鉄触媒を用いた水素還元によって  $\text{CO}_2$  からグラファイトを調製し (650°C, 6 h 以上)、名古屋大学年代測定総合研究センタータンデトロン加速器質量分析計 2 号機によって  $^{14}\text{C}$  年代を測定した。

較正曲線 (Stuiver et al., 1998) に従い、 $^{14}\text{C}$  年代から較正年代を算出した。得られた結果を表 1-3 に示した。 $^{14}\text{C}$  年代および較正年代の測定誤差には、 $1\sigma$  を付した。また、平均値については  $2\sigma$  の結果もあわせて記載した。なお本報では、 $^{14}\text{C}$  年代の中央値を較正した結果を ( ) の内側に、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差の両限を較正した値を ( ) の外側に示すものとした。

### <考察>

#### 1. 「伝平業兼筆 春日切」

春日切と総称される古筆切は、雲母引き料紙に特徴ある筆跡で一面に七行書き、和歌一首が三行書きにされた古写本の断簡である。その写本の一つが「公忠集」であるが、これは古筆切として解体されずに一冊完全な形で残っている。古筆切になっているものは、残欠本である「九条殿師輔集」、現在に伝わっていない散逸私家集の「花山院御集」、「小野宮実頼集」などである。本研究において  $^{14}\text{C}$  年代測定を行った春日切は、「小野宮実頼集」末部散逸部分と思われるものである。

春日切の極札は、平業兼 (?-1185-1209-?年) の筆であることを伝えている。すなわち、平安末期から鎌倉初期の書ということになる。また、書跡の面からも、鎌倉期のものと判断することができる。

ただし、春日切は鎌倉初期ないしは平安末期の書ではあるが、業兼の手になるものではないと考えら

れている。完本として伝来している「公忠集」の奥書には、本文とは異なる筆跡で「校合畢／従三位行治部卿平朝臣業兼」とある。すなわち、平業兼は校合をおこなった人物であることを示しており、本文の書写者は業兼の身近にいた別人ということになるのである。

また、この奥書から判断すると、平業兼が校合をおこなったのは、業兼が従三位治部卿の地位にあった元久二年（1205年）から承元三年（1209年）までの間ということになる。すなわち、本文が書写された時期はそれとほぼ同じ頃、あるいはそれより少し前となるはずである。

$^{14}\text{C}$ 年代測定の結果を表1に示した。測定に供した「小野宮実頼集」の断簡と思われる春日切は、鎌倉初期から中期にあたる13世紀の較正年代を示した。奥書・書風からの見解とあわせて考えると、この春日切は鎌倉初期の古筆切であると結論付けることができる。

表1. 伝平業兼筆春日切の $^{14}\text{C}$ 年代

測定回数	$^{14}\text{C}$ 年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	784±37	1220(1261)1279
2	806±34	1215(1225, 1226, 1243)1273
3	836±35	1164()1168, 1186(1217)1257
av. ±1σ	808±20	1217(1224, 1229, 1240)1262
±2σ	±41	1192()1199, 1209(1224, 1229, 1240)1277

## 2. 「伝俊寛僧都筆 三輪切」

三輪切と総称される古筆切は、歌一首を一行で書くという形式にしたがって書写された「古今和歌集」写本の断簡である。三輪切とされている古筆切にも数系統があるが、 $^{14}\text{C}$ 年代測定を行った本資料は、東京国立博物館蔵三輪切と同一筆跡の古筆切である。

三輪切の極札には、俊寛僧都とある。俊寛（1142?～1179?年）は、平氏政権打倒を図り、京都東山鹿ヶ谷の山荘にて行われたいわゆる「鹿ヶ谷の謀議」に関与した罪で、1177年に薩摩国鬼界島に配流された人物である。それゆえ、俊寛の筆であるならば、三輪切は平安末期の書ということになる。

しかし一方で、その書跡にもとづく判断から、現在では、三輪切は俊寛よりも後世の鎌倉時代に書写された写本の断簡であると考えられている。

表2に示したように、この三輪切について行なった $^{14}\text{C}$ 年代測定は、較正年代にして14世紀頃、鎌倉後期もしくは南北朝期の書写本であることを示した。すなわち、平安末期の僧侶俊寛の手になるものではなく、後の鎌倉時代になって書写されたとする書跡史的な知見を支持する結果が得られた。

表2. 伝俊寛僧都筆三輪切の<sup>14</sup>C年代

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	563±33	1327 ( ) 1346, 1393 (1402) 1413
2	643±34	1296 (1302) 1325, 1349 (1370, 1381) 1391
3	594±40	1303 (1328, 1344) 1368, 1383 (1394) 1405
4	653±30	1295 (1300) 1315, 1354 (1373, 1378) 1387
5	698±37	1281 (1291) 1299, 1374 ( ) 1376
6	542±37	1331 ( ) 1340, 1397 (1408) 1424
av. ±1σ	615±14	1303 (1319) 1328, 1345 (1352) 1368, 1383 (1389) 1394
±2σ	±29	1300 (1319) 1332, 1339 (1352) 1373, 1377 (1389) 1399

## 3. 「伝藤原行能筆 齋宮女御集切」

三十六歌仙のひとり齋宮女御徽子の家集は、歌数および歌の配列順序の相違によって、四系統に分けられている。しかし、新たにこの四系統のいずれとも異なる「齋宮女御集」の断簡が出現した。

この古筆切の極札には藤原行能とある。藤原行能（1179～1250?年）は、藤原行成・藤原行尹とともに、「世尊寺流の三筆」として知られる鎌倉時代の能書家である。この齋宮女御集切が、極札にある藤原行能の筆であるとする、鎌倉前期の書であることになる。

しかし、<sup>14</sup>C年代測定の結果（表3）は、鎌倉後期もしくは南北朝期に相当する較正年代を示した。較正曲線は1200～1300[cal AD]付近で大きな負の傾きをとるため、鎌倉時代の資料に対して、<sup>14</sup>C年代測定法が高い分解能をもつことになる。すなわち、当該の古筆切のもとになった写本が書写されたのは、行能が能書家として活躍した鎌倉前期よりも下る時期であることを<sup>14</sup>C年代は示している。

表3. 伝藤原行能筆齋宮女御集断簡の<sup>14</sup>C年代

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	606±30	1302 (1325) 1333, 1338 (1349) 1369, 1382 (1391) 1399
2	649±32	1295 (1301) 1319, 1352 (1372, 1379) 1389
3	691±32	1283 (1293) 1300, 1374 ( ) 1377
av. ±1σ	649±18	1297 (1301) 1304, 1366 (1372, 1379) 1386
±2σ	±36	1292 (1301) 1326, 1348 (1372, 1379) 1391

## &lt;まとめ&gt;

極札に記された人物の生没年にもとづく年代、書跡史学的な知見から求められる年代、<sup>14</sup>C年代測定によって得られた較正年代。これらを比較すると、いずれの<sup>14</sup>C年代も、書跡史学の視点から指摘されている書写年代を含む値を示し、必ずしも極札による年代とは一致していない。すなわち、古筆切には書写年代と全く異なる時代の人物の極札をもつものがあることが、<sup>14</sup>C年代測定によっても明らかにされたのである。

極札と書風とで異なる年代を示す古筆切の存在は他にも知られている。例えば、平安時代の書跡を有

する伝光明皇后（701-760年）筆の古筆切や、同じく平安時代の書風を呈する伝第六代鎌倉將軍宗尊親王（1242-1274年）の古筆切などである。<sup>14</sup>C年代測定法は、こうした古筆切の書写年代を判定する手法の一つとなりうるのではないだろうか。

<謝辞>

本研究の一部には、文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B)，課題番号：16700585，研究代表者：小田寛貴）を使用した。記して謝意にかえたい。

<参考文献>

- Oda, H., Yoshizawa, Y., Nakamura, T. and Fujita, K., (2000) AMS radiocarbon dating of ancient Japanese sutras. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 172, 736-740.
- Oda, H., Masuda, T., Niu, E. and Nakamura, T. (2003) AMS radiocarbon dating of ancient Japanese documents of known age. *Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry* 255(2), 375-379.
- Oda, H., Ikeda, K., Masuda, T. and Nakamura, T. (2004) Radiocarbon dating of Kohitsugire (paper fragments) attributed to Japanese calligraphists in the Heian-Kamakura period. *Radiocarbon* 46(1), 369-375.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Back, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plicht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon*, 40(3), 1041-1083.

# Radiocarbon dating of Kasuga-gire and Miwa-gire by AMS

Oda Hiroataka <sup>1)</sup>, Ikeda Kazuomi <sup>2)</sup>, Nakamura Toshio <sup>1)</sup>

1) Center for Chronological Research, Nagoya University, Japan

2) Faculty of Literature, Chuo University, Japan

*Kohitsugire* are ancient paper sheets with elegant calligraphy. They were originally leaves of ancient manuscripts written mainly from the 8th to the 15th century. Old manuscripts are rarely discovered as complete books; therefore, *kohitsugire* can be significant materials for historical studies if the written ages or the calligraphists or both are clarified. Most of *kohitsugire* have *kiwamefuda* certificates which identify the calligraphists. It is also a clue about the written age. In this study, we determined the written ages of three *kohitsugire* (*Kasuga-gire* traditionally attributed to *Taira no Norikane*, *Miwa-gire* attributed to *Shunkan*, *Saigu-no-nyogo-kashugire* attributed to *Fujiwara no Yukiyo*) from radiocarbon dating, calligraphical investigation and the *kiwamefuda*. Comparison of radiocarbon age and the calligraphical feature of each *kohitsugire* gave fair agreement. The result was, however, in obvious conflict with the age of the calligraphist noted on the *kiwamefuda*, and showed the doubtful reliability of *kiwamefuda*.